

7日に兵庫県西宮市で開幕する全国高校野球選手権に、八戸学院光星が2年ぶり8回目の出場を決めた。今春のセンバツでは2回戦で敗れ、春の県大会では強豪聖愛に競り負け初戦敗退。いずれも好機にあと1本が出ずに苦杯をなめた。

駆け上がれ 頂点へ

光星 2年ぶり夏の甲子園

上

「春の2度の敗戦を糧に、チームが変わった(主将奥村)。意識を変え、つかみ取った甲子園切符。先輩たちが成し遂げられなかった悲願の頂点に向け、挑戦する「夏」が始まる。(本田海輝)

「猛打、強打の光星復活」

春の敗戦糧に成長

夏の県大会優勝決定の瞬間、マウンドに駆け寄り喜びを爆発させた八学光星ナイン。春の苦い経験を糧に、県王者に返り咲いた。7月21日、青森市営球場



と攻め立てながら後続が凡退した。「弱い。勝負どころで弱すぎる」。仲井監督は試合終了直後、こう言葉を吐き出した。この敗戦がチームに与えた意味は、大きかった。「あの負けがいろんなことを教えてくれた。あれがなければ夏の甲子園はなかったと思っ」と主将奥村。仲井監督も「選手のハートに火がつきかけになった」と振り返る。

いかに好機を着実にものにするか。課題を克服するため、得点圏に走者を置き、アウトやストライク、ボールカウントを細かく設定した、より実戦重視の打撃練習に時間を費やした。「得点圏に走者を置いたまま、凡退はしない」と意識して週末の練習試合に臨んだ。1点を奪う重みや大切さが、いつしかそれぞれの選手の体に染みついていった。特に象徴的だったのは主

砲益田だ。チーム一の飛距離を誇り、これまでは「自分が決めてやる」と無理に振り回すこともあったが、春の敗戦を境に状況にに応じて流し打ちを心掛けた。自主練習にも励み、ひたすらバットを振った。夏の県大会準々決勝の弘前東戦では大きな一発を放ったが、準決勝以降は鋭いライナー性の打球で適時打を放つ場面が目立った。「チャンスで1本打って打点を稼ぐのが4番」と、言葉にも成長の跡がうかがえるようになった。

光った勝負強さ。夏の県大会では全6試合で相手に一度も主導権を握らせなかった。決勝・大湊戦では各打者が死球を怖がらず、ボールを見極めて相手投手を精神的に追い詰めた。それが三回の一挙8得点につながった。

「一戦ずつ選手が力を付け、チームとして本当によくまとまった。私が目指していた、しぶとい、そののない野球ができるようになった」。指揮官は敗戦を糧に大きくなったチームに、充実感を漂わせた。

「1点の重み」意識強く

を合言葉に挑んだ今春のセンバツ。ところが龍谷大平安(京都)との2回戦で、主戦左腕の市岡を攻めあぐねた。得点圏に6度走者を置いたものの、本塁が遠く、0-2で敗退した。そして約2カ月後の春の

追う最終回は無死二、三塁